

最近接発達領域は「可能性の領域」か

—— 発達の力動の観点からの考察 ——

堀 村 志 を り

はじめに

本論文はヴィゴツキーのZPD理論に注目し、発達の力動の観点から最近接発達領域（以下ZPDと略記）の新たな解釈を試みるものである。ヴィゴツキーについては、すでに筆者は、その発達論が知的能力のみならず、情動や欲求などの発達の力動性の観点から構成されていることを明らかにしてきた〔cf. 堀村、2008、2010、2012〕。それらの蓄積を踏まえて、本論では、ZPDを発達の「可能性の領域」と捉える従来の解釈の問題点を明らかにし、ZPDは、「可能性の領域」ではなく、発達の力動性とその働きを増している領域であることを示す。そしてZPD理論が、多様化、拡張化されて解釈されてきた原因の一端を明らかにすることを目的とする。

ヴィゴツキーは、ZPDについて、次のように述べている。「教育学は、子どもの発達¹⁾の昨日にではなく明日を目指さなければならない。そのときにのみ、教育学は、最近接発達領域（зона ближайшего развития）のなかでいま横たわっている発達過程を、教授-学習（обучение）過程のなかで呼び起こしうるのである」〔Выготский, 1982, c.251〕。「未成熟の領域は、しかしながら、成熟しつつある（созревающий）過程の領域であり、子どもの最近接発達領域を成します」〔1984a, c.264〕。このように定式化された「最近接発達領域」の理論は、その解釈をめぐる、これまでも幅広い議論がなされてきている。しかし、そうしたヴィゴツキーZPD理論の活況とは裏腹に、教育の事象を説明するための方便ともとれるような仕方での理論が用いられているのも散見される。

このような状況において、中村和夫はZPD理論の解釈事情を整理し、多様で拡張的な解釈が流布する理由を考察している。中村は、わが国の論者が、ZPD理論に対し、形式的・技術主義的な解釈をおこなってきたことにその原因を求めている。そのことについて中村は、田丸敏高を引用しながら、次のように

いう。『「当概念が導入されたときの契機・事実的および実験的根拠・意義といったもの、すなわち、当概念の理論的内容を剝奪し、『発達に先廻りする教育』とか『教育による発達の促進』とかという面を無限定的に教育技術的にのみ理解する仕方』（田丸、1977, p.17）〔中村、1998, p.143〕によって、この概念が、『すべての年齢、すべての内容にわたる非常に一般的な教授法の問題』（同上〔田丸〕、p.18）を提起したものと拡大解釈（誤解）されてしまって、その独自の意味が見失われてしまっている」〔同、pp.143-144〕。さらに中村は、「最近接発達領域の概念を、一般的・形式的にとらえて無限定に拡大解釈してはならない。たとえば、科学的概念（基本教科）の教授が課題となっていない発達段階の子ども（乳幼児や知的障害の重い子ども）への教育や、知的発達を離れた情操教育にまで広げてはならないのである」〔同、p.144〕と述べ、ZPD理論は科学的概念の教授、発達という限定的な文脈のなかで解釈されるべきであるという結論を導く。この中村の問題追究の視点は、正しく設定され、論証も正確になされているように思われるし、また、こうした中村の問題整理と論拠を示しながら進められる厳密な論証は、ZPD理論の拡大解釈に歯止めをかけるといった役割を果たしていると思われる。

しかしながら、ヴィゴツキーは「子どもの心理発達における遊びとその役割」という論文のなかで、幼児期の子どもの遊びとZPDの関係に論及している。つまり、科学的概念の教授、発達という文脈以外でもZPD理論は展開されているのである。したがって、ZPD理論は中村の限定よりも幅広い射程を有していると考えなければならない。ZPDが多様に解釈される根本原因は、まだ別の点にも残されているように思われる。

例えばバークL.E.&ウィンスラーA.は、ZPDについて「ヴィゴツキーが示唆していることは、評価すべきなのは、子どもたちが1人で行なえたとか、あ

るいはすでに知っていることではなく、むしろ他者の助けによってできるようになるとか、学習の可能性をもっているかなのです」といい、「最近接発達領域は、学習や認知発達が引き起こされる可能性の高い領域です」〔2001, p.23〕と述べている。ここでZPDは「可能性」という言葉によって解釈されていることが分かる。

こうした可能性によるZPD解釈は、中村がとりあげた論者の解釈の中にも見うけられる。「子どもの知的可能性の、つまり、子どもの知能の発達の最近接領域」(エリコニンД.Ъ.)〔中村、1998, p.150〕、「個人の力だけで達成可能な水準と、おとなの援助やモデルとなる子どもたちの存在によって達成可能となる水準の違い……すなわちヴィゴツキー……のいう“発達の最近接領域”」(前川久男)〔同、pp.142-143〕。これらの解釈は、ZPDを発達の可能性の領域とみなしている²⁾。

こうして見ると、内外の少なくない論者たちが、ZPDを可能性の領域として解釈していることが分かる。そこで本論では、ZPDが多様に解釈される理由の一端を探るため、論者たちに共通する、「可能性の領域」という解釈に焦点をあてて考察を進めていくことにしよう。

以下本論文の構成は、まず第1節で、ZPDを「可能性の領域」と解釈する論者の議論から三つの論点(「成熟しつつある」、「可能性」、「最近接」)を抽出する。そして第2節にて、ヴィゴツキー発達論の二つのテーマ(発達の力動と因果性)を取り出す。そして以下の節で、その二つのテーマを背景としてZPD理論を考察しながら、論者の三つの論点を検討していく。第3節にて発達の力動と「成熟しつつある」の関係を、そして第4節で可能の論理を検討し、第5節で「最近接」と因果性の関係を検討する。

1. 発達の「可能性の領域」という解釈

ZPDが発達の可能性の領域であるということ、一定の理論的根拠を示して論じている論者には前述の中村がいる。中村は、その根拠を原語の意味に求めているのだが、その主張を検討することから始めよう。

実は、そもそものはじめに、「ближайший」を「最近接の」と訳したところに、このわかりにくさの原因

がある。

「ближайший」は確かに「близкий」(近い)の最上級であるから、「最も近い、つまり、最近接の」という意味に間違いはない。しかし、この単語には、そこから転じて、「次の」とか「次に続く」という意味がある。……したがって、「最近接発達領域」とは、実は「次の発達の領域」とか「次に続く発達の領域」という意味なのである。発達とは基本的に時間的変化なので、「次に続く発達の領域」という訳語がふさわしいのではないかと思われる。〔中村、2004, p.10〕

こうしたことを受けて、中村は以下のようにZPDを規定する。

最近接発達領域とは、子どもがある課題を独力で解決できる知的発達の発達水準と、大人の指導の下や自分より能力のある仲間との共同でならば解決できる知能の発達水準とのへだたりをいう。このへだたりは、いまは大人や仲間の援助の下でしか問題の解決はできないが、やがては独力で解決が可能となる知的発達の可能性の領域(つまり、次に続く発達の領域)を意味している。いわば、子どもに成熟しつつある知的発達の可能性の領域のことを、最近接発達の領域と呼ぶのである³⁾。〔同、p.11〕

中村のこれら二つの引用文を通じて取り出すことのできる論点は、三つある。すなわち、一点目は「成熟しつつある」ということが発達の「可能性」と結びつけられるということであり、二点目は、発達は時間的変化なので、「次に続く」は「可能性」へと読み替えられるということである。そして三点目は、「最近接の」と訳される‘ближайший’は次に続くという意味だからZPDの本来の意味は「次に続く領域」であるということである。つまり、「成熟しつつある」、「可能性」、「次に続く」は同等視され、ZPD概念の内容を示していると考えられているのである。

もっとも中村のこうした主張には、それなりの正当性を認めることができる。邦訳版『思考と言語』によれば、‘ближайший’の語源に遡るまでもなく、ヴィゴツキー自身がZPDを「最近接可能性領域(зона ближайших возможностей)」〔1982, c.187/2001, p.228〕と言い換えている箇所があるからである。‘возможность’は「できること、ありうること、可能性」などといった意味であるので、ここでの邦訳は決して

適切性を欠いたものとはいえない。そしてその点からしても、確かに中村のZPDは発達の可能性の領域であるという主張は、ヴィゴツキー自身の記述によっても裏付けられているといえそうである。

しかし、訳語に適切性を欠く点はないとしても、(1)「成熟しつつある」と「可能性」は結びつくのであろうか。また、(2)可能ということは、中村がいうような時間的変化と結びつくのであろうか。さらには、(3)‘ближайший’は、「次に続く」という意味を中心に論理立てがなされているのであろうか。これらの問題を考察しながら、ZPDを可能性の領域と解釈することが、なにをもたらしめているのかを解明してゆこう。以下、中村の一つ目の論点は第2節、第3節、第4節を通じて、二つ目の論点は第2節および第4節で、三点目の論点は第5節でそれぞれ検討される。

2. 「成熟しつつある」という語の意味

まずは、中村の主張から見いだされた一点目の論点の「成熟しつつある」ということの意味を検討するところから始めよう。「成熟しつつある」という語がZPDの内容を示すという点は、ヴィゴツキーのZPDの定式がそのように示されているため、問題はない。しかし、「成熟しつつある」と邦訳される、このロシア語の‘созревающий’には、いささか注意が必要である。この語は、‘-ющий」という語尾から、「成熟する」という意味の不完了体動詞‘созревать’の能動形動詞現在の形であることが確認できる。したがってこの語は、ことがらが現在進行中であることを指し示しており、その動詞の意味から「成熟しつつある」と訳すことができる。したがって、ヴィゴツキーの定式からすれば、ZPDはこの「成熟しつつある」という現在進行中のことがら、過程、移行を表すものとして理解されるのである。こうしたことからすれば、「成熟しつつある」という語は、中村の二点目の論点である、発達は時間的経過なので「次に続く」ということが「可能性」と結びつく、という主張をむしろ強化するようにさえ思われる。

しかし、ヴィゴツキーがこの語を能動形動詞現在の形で示すのには、時間的経緯とは別の理由があるように思われる。ヴィゴツキーは、年齢期の発達について言及するなかで、「発達は、まず第一に、前の段階にはなかった絶え間ない発生と新しい構成に

よって、特徴づけられている不断の自己運動の過程(непрерывный процесс сомодвижения)です」[1984a, c. 248]と述べ、年齢期の発達を運動のなかでとらえる視点を示している。また、年齢期を、発生した新たなものだけで区分することは不十分であるとして、「その発達の力動(динамика)、ある年齢期から他の年齢期への移行の力動をもっと考慮する必要があります」[1984a, c.248]と述べ、発達における力動の観点を導入している。この「自己運動」と「力動」とはおよそ同義であると考えられるのだが、これらのことから理解されるのは、ヴィゴツキーが「自己運動」もしくは「力動」という術語を用いて、第一に、発達を単なる時間的経緯としてではなく、力動的にとらえる視点を強調しているということである。また、第二に、発達は発生したもの、すなわち所産、結果によってはとらえられないと考えている、ということである。こうしたことから、「成熟しつつある」という語は、単に時間的経緯を示すことばというよりは、ヴィゴツキーのこうした発達を力動的にとらえる視点を内含しているということが理解できよう。

しかしながら、この発達の力動の問題系は、ヴィゴツキーが前述の著作と同時並行的に書いていた『情動の理論』という未完の著作の中にも存在しているように思われる。ここで少し迂回することになるが、その内容に立ち入って見てみよう。

この著書のなかで、ヴィゴツキーは、現代の心理学は危機に陥っており、その原因は心理学の二元性にあるという。心理学は、機械論(説明心理学)と唯心論(記述心理学)という二つの立場に分離してしまっているのだという。そしてこうした二元性の原因は、デカルト哲学の心身二元論に由来すると分析する[cf. 1984b, c.199]。ヴィゴツキーによれば、デカルトの自然学は、その機械論的な手法により、因果論的な説明を行うのだが、そこでは自然から力動的なものが抜き去られ、自然は機械的に扱われることとなる。「デカルトは、物体同士が機械論的(механический)に作用し合っている無際限の(бесконечный)⁴⁾集合体である世界を説明する機械主義的(механистический)原理を完全に、確実に保持している。……あらゆる物体は無際限に分割しうる(делимый)。……デカルトの自然の説明は、数学的-機械論的原理に専ら立脚しているのである」[1984b, c. 269-270]とヴィゴツキーは述べている。

しかしながらデカルトは、一方で、その哲学において、唯心論的な説明をおこなう。そこでは観念から出発して、神の認識へといたると語られる。しかし、そこでは原因と結果の説明が逆転してしまう。神が創造した、いわば結果としての人間観念から出発して、原因としての神に遡らなくてはならない。すなわち、原因と結果とを逆転させた目的論的な方法でしか説明が出来ないことになってしまい、これは因果論の説明とはいえないことになる。しかし、ヴィゴツキーはこうしたデカルトの方法は、それぞれが単に分離しているのではなく、相互に補完しあっているのだという。ヴィゴツキーは、デカルトにとっての「情念 (страсть)」⁵⁾は、「それ自体を説明するために、唯心論の原理と機械論の原理、神学的原理と自然主義的原理との結合を必然的に求めるのである」〔1984b, c.218〕と述べている。

そして、心理学にとって問題なのは、こうしたデカルト哲学の論理形式が、そのまま心理学の分野にも持ちこまれていることだ、とヴィゴツキーは考える。現代を二分する説明心理学と記述心理学において、説明心理学は因果的説明を行うが、情動の説明を十分には行えない⁶⁾。一方記述心理学は、人間の感情を「表象 [представление]⁷⁾」〔1984b, c.290-291〕として記述できるものの、それ自身の原因の説明を十分行うことができない。それゆえ原因と結果とを逆転させた目的論的な説明を余儀なくされる。しかし、現代においてこれらの一見すると相反する立場に見える心理学は、デカルトの論理形式同様、互いに補完し合って成立しているというのである。ヴィゴツキーは「因果的説明はその補完として目的論的な審議を要請したのである」〔1984b, c.308〕と述べている。むろん、ヴィゴツキーの立場はここにはない。ヴィゴツキーは、このデカルト哲学的二元性を克服する途をスピノザ哲学を正しく理解することによって見だし、新たな心理学の途を開くことを試みようとするのである。「スピノザの学説には、その最も奥深い内的な核心を形成しながら、まさに現代の感情心理学が分解したところの二つの部分のいずれにもない、すなわち、因果的説明と人間的情念の生の意味の問題との統一、感情の記述心理学と説明心理学の統一が含まれている」〔1984b, 301〕とヴィゴツキーは述べている。

では、そうしてとらえられているスピノザの方法とはいかなるものであろうか。この著作は未完に終

わっているため、結論を明確化することはかなわないが、少なくとも以下のヴィゴツキーの意図は明らかであろう。第一に、デカルトの自然的説明がそぎ落としてしまったところの生きている自然、自然の力動性を、スピノザ哲学によってよみがえらせるということである。そして第二には、デカルト哲学の目的論的な側面が不可能にさせていた原因から結果を考えるという因果論的な説明方法を、スピノザ哲学によって取り戻すということである。したがってこれらは、先に見た二つの観点、第一に発達を力動でとらえるという観点、第二に発達は所産や結果では把握できないという観点と同じ系列のものだと分かる。

こうしたことから、ヴィゴツキーの発達の議論には、力動の論理、因果的説明のテーマが背景として存在していたことが確認されるのである。したがってここからは、このことを念頭に考察を進めていくことにしよう。

3. 発達の力動

ところで、上記のテーマのうちの一つ、発達の力動のテーマは、ヴィゴツキーの晩年の講義を論文にした「子どもの発達における遊びとその役割」において、ZPD理論との関係で登場している。では、この論文をもとに、発達の力動の視点が具体的にZPD理論のなかで、どのように展開されているのか見ながら、中村の第一の論点である「成熟しつつある」ことの内容を検討することにしよう。

ヴィゴツキーは、就学前期の子どもは、日常生活においてルールに従えなくても、遊びのなかでは喜びをもってルール（役割）に従うという〔cf. 2005, c.209〕。ここにはルールを楽しむ、喜びとする子どもの心理がある。ルールの認識と喜びの情動は同時に成立しているのである〔cf. 2005, c.216〕。しかし、二歳児ではどうだろう。二歳児は目の前にあるキャンディーを、遊びのルールに従って扱うことをせず、衝動的満足に従って食べてしまうだろう。就学前期の子どもは、目の前のキャンディーをもちろん食べたいが、二歳児のように衝動的満足にしたがうよりも、遊びのルールの下でそれを扱うことの方により大きな喜びを見出すのである。ヴィゴツキーはこうした就学前期の子どもの心理をスピノザの『エチカ』の一節と重ねていう。「……ある研究者がスピノザの

ことばを思い出して表明したように『情動 (аффект) は、別のより強力な (более сильный) 情動によってのみ克服することができる』⁸⁾ [2005, c.216] と。

では、このスピノザの「情動」とはいかなるものであろうか。「情動 (affectus) とは我々の身体の活動能力 (corporis agendi potentia) を増大しあるいは減少し、促進しあるいは阻害する身体の変様〔刺激状態〕、また同時にそうした変状 (affectio) の観念であると解する」[E3D3]⁹⁾。情動はこのように定義される。だが同時にスピノザは「人間の本質 (hominis essentia)」は「自己の存在 (esse)¹⁰⁾を維持しようと努める努力 (conatus) そのもの」であるという [E4P21Dem, cf. E3P7, E3P7Dem]。そしてそのような力は、概して人間身体においては、衝動として捉えられ、精神においては衝動、欲望、意志として捉えられるという [cf. E3P9Sch]。そして身体が触発され、その状態が精神において捉えられたとき情動と呼ばれることになる [cf. E3P3]。つまり情動は身体の活動力すなわち衝動の増減を表現しているのである。したがって、ある情動よりも別の強力な情動があらわれるということは、人間の本質であるところの、自己の存在を維持しようと努める努力、すなわちコナトゥスが増大していることを指し示しているのである¹¹⁾。そしてこうした人間の本質であるコナトゥスの増大としての、さらに強力な喜びの情動は、ヴィゴツキーでは、遊びのなかでルールにしたがうことと一体化されているのだが、それはZPDの定式に結びつけられる。

こうして遊びは子どもの最近接発達領域を産出する。遊びの中で子どもはいつも、自分の平均年齢期よりも上位にあり、自分の普段の日常的行為よりも上位にいる。[Выготский, 2005, c.220]

このことから、遊びのなかで喜びの情動が増大するという力動的過程は、ZPDと同義的であるとみなすことができる。そしてそれは「成熟しつつある」という過程の内容を表していると考えられるのである。

だがこの力動的内容は就学前期の発達、そして遊びについてのみに当てはまるのではない。ヴィゴツキーはこのZPDの定式を述べた直後に「発達に対する遊びの関係は、発達に対する教授-学習の関係に匹敵するということになる」[2005, c.220]と述べてい

るからである。すなわち、学童期の教授-学習にもこうした情動や欲求で表現されるような力動的な過程があり、それは学童期のZPDの内実を示すと考えられるのである。こうして、「成熟しつつある」とは、そのことがらからすれば、就学前期、学童期を問わず、発達の力動性がその力を増すことと同義であることが明らかとなるのである。

4. 可能のアポリア

ところで、中村の論点の二つ目では、時間的変化としての「次に続く」が、発達の「可能性」と結びつけられていた。しかしこの「可能性」という語はどういったことがらを指し示す語なのであろうか。可能とは、アリストテレスの用語として、まずは理解される。可能態と現実態の区分によってものごとの生成を説明する用語である¹²⁾。

では、ZPD理論が可能-現実の区分によって成り立っているのだとしたら、それは、どのように認識されるのであろうか。ZPD理論の解釈者の中で、この問題を取り上げた論者がいる。それは守屋慶子である。守屋はZPDを教育との関係で語りながら次のようにいう。「模倣を通じて、こどもにできなかったことができるようになるとき、その問題は発達の最近接領域にあったというように考える」[1994 (1986), p.167]とすると、「もしこどもにヒントや誘導的質問を与えて問題を解かせ、その結果としてしかこどもの発達の最近接領域を知ることができないのであれば、彼[ヴィゴツキー]¹³⁾の主張、つまりその領域に働きかける教育などというものは実現不可能である。各々のこどものその領域を知ることができるのは教育の前にはではなく、教育が終わった後になるからである」[同]。つまり、可能的にあるといわれるものが、実際には事後的にしか理解できないというのである。こうした守屋の指摘は、ZPDを可能的論法で理解することで陥るアポリアを鋭く抉り出している¹⁴⁾。

そもそも、この守屋の指摘は、ZPDの矛盾というよりも、はからずも可能的論法のアポリアを取り出している。こうした可能的論法は、よく見ると、ことがらの順序とそれを認識する順序が逆転させられることで成立している。つまりことがらとしては、可能的なものから現実的なものへと進むのだが、その認識の先後関係はそれがらの順序とは逆転

し、可能といわれるものは現実化したものから遡ってしか可能であったと認識されないからである。ことがらからしても認識からしても、先にあるものから後に来るものへと、つまりここでは可能から現実へと進まなければならないのだが、認識からすると、それが後から前へと送り返されているのである。つまりそれは目的論的な観点から成立する論理なのであり、ことがらを因果的に説明してはいないのである。それゆえ、発達を思考するときには、矛盾をきたし、守屋が指摘したようなジレンマに陥ってしまうのである。したがって、発達の可能領域は、発達が時間的変化なので、次に続く発達の可能領域を意味するという中村の二点目の論点は、可能でとらえるときに、先後関係が逆転してしまうがために、そのようにいうことに自己矛盾をきたしてしまうし、それゆえ、一点目の論点である「成熟しつつある」と可能性も結びつけることができなくなってしまうのである。

この可能ということに関して、スピノザは次のように述べている。「我々は或る事物の作用因 (causa efficiens)¹⁵⁾を認識はするがその原因が果たして決定的なものであるのかどうかは知らない場合に、その事物は可能的と呼ばれる」〔CM, I-3〕¹⁶⁾。さらに、「ところでもし人が、私の可能的と呼ぶものを偶然的と呼び、反対に私の偶然的と呼ぶものを可能的と呼びたいなら、私は別に反対はしないだろう。……ただその人が、この二つのものは我々の認識の欠陥にほかならず、何らかの實在的な物でないということ承認してくれさえするなら、それで十分である」〔同〕という。つまり、可能的論理の問題は原因から切り離された認識にある。すなわちそれは必然的なものの認識¹⁷⁾の欠如であり、偶然と呼ばれても仕方がないものなのである。そしてそれゆえ、目的論的な論法に頼らざるを得ず、結局は實在的なものを示しえないのである。そしてもし、ヴィゴツキーがこうした論理でZPD理論を構成していたとすれば、第2節にて見たヴィゴツキーの発達論のテーマのひとつ、目的論の排除は実現されていないことになろう。

では、実際に、ヴィゴツキーのZPDの理論は可能的論法で構成されているのであろうか。先のZPDの定式が導出される引用文を再び、少し前の部分から見よう。

このようにルールにしたがうということは、生活

の中で行うことが不可能なことである。ところが、遊びの中ではそれが成立しうるのである。こうして遊びは子どもの最近接発達領域を産出する。遊びの中で子どもはいつも、自分の平均年齢期よりも上位にあり、自分の普段の日常的行為よりも上位にいる。〔Выготский, 2005, c.220〕

ここでは二つの時間が語られている。一つ目は日常の時間であり、二つ目は遊びの時間である。問題は二つ目の遊びの時間である。この時間の中に年齢期という時間区分が入り込んでいるのである。続くフレーズでヴィゴツキーは「遊びは凝縮した姿の中に、虫めがねの焦点の中にと同じように、発達のすべての傾向を自己の中を含んでいる」〔2005, c.220〕と述べている。つまり、ZPDに関する時間は、一直線上に分割された目盛の上を経過するように進むのではなく、むしろ入れ子状に、重層的にとらえられている。

ではこの遊びに内包された時間は何を示しているのか。それは、本来的には次なる年齢期においてなしうるルールへの従属ということからの生じる時間である。換言すれば、発達の力動としての喜びの情動、「成熟しつつある」ということが生じる時間である。だがここで注意しなくてはならないのは、この場面が遊びという虚構場面だからといって、子ども自身に生じていることがらも虚構だということではないということである。そこではこれらのことが現実に生じている。発達の力動は、現実的に作用しており、現働していると思なされるのである。ゆえに、この発達の力動は可能性として、つまり現実性を剝奪されたかたちで存在しているのではない。それは、可能的にあるのではなく、現にここで働いていることを示している。よってヴィゴツキーのZPDの理論は、可能-現実の論法によって構成されてはいないと理解されるのである。

5. 「最近接の」という語の意味

ところで、このようにことがらの中で力動が作用することは、スピノザでは、最近原因といわれる。スピノザは、物事の正しい定義は事物の最近原因を含んでいなければならないと考えるのである。スピノザは、「定義が完全と言われるためには、事物の内的本質を明らかにしなければならないであろう」

〔TIE95〕と述べた上で、円を例に説明する。「例えば円は、この法則に従えば、次のように定義されるべきであろう。すなわち円とは、一端が固定し他端が運動する任意の線によって描かれた図形であると。この定義は明瞭に最も近い原因（causa proxima）を包含している」〔TIE96〕。そして、「事物の概念すなわち定義は、他のものと結び付けずにただそれだけを見てそれから事物のすべての特性が結論され得るようであればならない。これは今あげた円の定義においてみられるところである」〔TIE96〕と述べる。この定義は、最近原因が内的な特性によって示されている内的発生の定義であることを述べている。

一方最近原因を示さない円の定義とは次のようなものである。「もし円が、中心から円周へ引かれた緒線の相等しい図形であると定義されるなら、何びともこうした定義が少しも円の本質を明らかにせず、ただその或る特性を明らかにするにすぎないことを見のがさないであろう」〔TIE95〕。この定義は、われわれが数学において定義するような、一点から等しい距離にある点の集合、という円の定義と同一である。しかし、スピノザはこうした定義では円の本質すなわち最近原因を示せないというのである。なぜならば、この定義は点の集合といわれるように、無数の点の表象¹⁸⁾による静的な「名目的定義」〔江川、2003、p.30〕にすぎず、何ら運動を示さないからである。

つまりここでは、暗にデカルト的な表象によって事物を定義する思考法が、原因を示すのに適当でないと批判されているのである。それは、ヴィゴツキーが『情動の理論』において述べていた機械論（説明心理学）と唯心論（記述心理学）への批判と重なる。つまり、分割的で表象的な定義では、運動や力動の観点を示すことはできず、原因も語るができなくなってしまうのである。

ところで、この最近原因とは人間においてはどのようにとらえられるのであろうか。スピノザは、『エチカ』において「最近原因としての我々の本性」〔E4P35Dem, E4App〕といういい方をしており、そこから明らかなのは、最近原因は、人間であるわれわれの本性であるということである。また、この「人間本性」は「人間の本質」ともいい換えられており、「人間の本質そのもの」は「言いかえれば（第三部定理七により）各人が自己の存在を維持しようと努め

る努力（conatus）そのもの」〔E4P21Dem〕であると述べられているのである。

こうしたことから、スピノザにおいて、人間における最近原因は人間の本質であるところのコナトゥスと同義的に理解されるものなのである。したがって、人間の存在の変化は、最近原因であり人間の内的本質であるところのコナトゥスの増減によって説明されるのが正しい説明ということになる。

そのようなことからすれば、ヴィゴツキーは、自己運動もしくは発達の力動と呼んでいたものをスピノザの情動の理論によって説明していたが、そのこととこの最近原因の議論は理論上重なっているということが分かるのである。

そのように見てくると、ZPDの「最近接」といわれる語は、スピノザの最近原因の「最近」ということばとの単なる偶然の一致とは考えにくい。また、語の使用法からしても、ラテン語の‘causa proxima’は「最近接原因」とも訳されるが、その‘proximus’という（「最近接の」という形容詞）語は、ロシア語では、（最近接発達領域‘зона ближайшего развития’というときの）‘ближайший’という（「最近接の」という形容詞）語に該当するのである。そのようなことからすれば、最近接発達領域は、最近原因であるところの発達の力動性とその働きを増している領域であるという解釈が成り立つのではなかろうか。

したがって、中村が一つ目の論点で示していた、‘ближайший’は次に続くという意味だからZPDの本来の意味は「次に続く領域」である、という理解よりは、むしろZPDとは、発達の力動性つまり最近原因としての力動が、その力を増しているその状態を表現していられていることばであると理解できるのである。

また、可能の論理は、可能性とその現実化されたもの、という項と項によって思考される。しかし、先にスピノザの円の定義のところで見たとように、それは点の集合によって円を定義することと同様のこととなる。それは無数の点を描いたとしても運動を説明しはしない。したがって、ヴィゴツキーが発達論のテーマとしていた発達の力動そして原因を説明しえないのである。とすればそれはむしろ、ヴィゴツキーが批判したような、デカルト的な分割的手法に陥ってしまうのではなかろうか。ヴィゴツキーが強調したいのは、点と点、項と項ではなく、むしろ人間の欲求や願望、情動に表現される内的原因とし

での発達の移行をなしうる力動性なのである。ZPD理論とはその力動性が増しているそのことを捉えるための理論なのである。

おわりに

ここまで、「成熟しつつある」とは、発達の力動が現働していることであり、それがZPDの内実をなしていることを確認してきた。そして「最近接の」という語は内的原因を示す語として使用されていることも明らかにした。そこから、ZPDは、発達の最近原因としての発達の力動性とその働きを増している領域であるという結論が導かれた。一方、ZPDを「可能性の領域」と解釈すると、発達の原因は目的論的にしか語れず、また項と項による分割的な思考法からは力動性の観点が抜け落ちてしまうため、ヴィゴツキーの発達論の主旨とは相容れないものとなる。したがって、これらのことからZPDを「可能性の領域」と考えることはできないことが明らかとなった。

そこで、われわれは、最初の問題に立ち返って回答しなくてはならない。少なくとも論者たちにZPD理論を多様に、また拡張的に解釈してきた原因の一端は、ZPD理論が有する発達の力動性を把握できなかったことに起因する。それゆえ、第一に、発達ということがらの順序に反して、逆方向から思考するという、目的論的な可能の論法を許してしまったこと。そして、第二には、発達を、可能的なものとして現実的なものというような項と項に分割して説明しようとするにより、ZPD理論が表現している発達の力動を捉えそくなってしまったこと。その結果、解釈は多様化、拡張化してしまったのである。

しかし、すでに見てきたように、ZPD理論は、こうした通常陥りがちな目的論的で分割的な手法とは別の視野から、発達を捉えようとする理論なのである。ZPD理論とはまさにその論理の地平に立つことで与えられる発達の力動の視界なのであり、ZPDとは発達の力動の増大への視力なのである。

だが、今回の考察では、ZPDの本来的な位置づけが示されたに過ぎない。今後に向けては、この発達の力動の観点からZPDを解釈したとき、発達について、教育について何が語られうるのかということを示すことが求められる。これについては次の機会に論ずることとする。

注

- 1) 「発達」という語は、近代的な右肩あがりの進歩を表す論理、もしくは目的論的な思想背景をもつ語として、その語の使用は回避される傾向にある。しかし、原語で‘развитие’といわれるこの語は、動詞‘развить’から成り、他に「成熟させる、展開する、くり広げる」などといった意味がある。本論での主張は、むしろこうした意味合いに近い。したがって、通常は近代批判の対象になるこの語を、本論ではそのままの形で使用することにする。
- 2) この枠組みに入らない解釈もある。それは、ZPDを子どもと外部環境との矛盾であるとみなす解釈（大村恵子）[cf. 中村、1998, p.140]である。なお、現代の代表的なヴィゴツキー解釈者であるエンゲストロームY.もダブルバインドによってZPDを捉えている[cf. 1987, p. 174]。
- 3) 傍点：引用者
- 4) ‘бесконечный’は、『研究社露和辞典』1988年版によれば「終りのない、無限の、無窮の、際限なく続く、はてしのない、多数の、無数の、数え切れないほどの……」などといった意味がある。しかしながら、デカルトは「無限」と「無際限」とを区別する。「無限なものについては、けっして論議してはならない。しかし、世界の延長、物質の部分の可分性、星の数など、単にそのうちにいかなる限界も認められないようなものは、無際限なものともみなすべきである」[『哲学原理』I-26]。したがって、ここでは‘бесконечный’をデカルトの用語として「無際限の」と訳した。
- 5) ‘страсть’は、デカルトの用語‘passion’のロシア語訳であるところから「情念」と訳したが、ヴィゴツキーはこの語を必ずしもデカルトの用語と関連づけて限定的に用いているわけではない。
- 6) 説明心理学の問題性について、ヴィゴツキーは「この学説の本質的根本理念は、人間的情動が原理的に意味がないことの完全な承認から成り、また、情動に照応する心的体験の構造や、意識の他のあらゆる生と情動の機能的関係や、情動の心理的本質を把握理解することができないばかりか、ある心理状態としての当該の情動とは何であるのかという問題を設定することさえできないという原理的不可能性から成る」[1984b, c.195]と述べている。
- 7) ‘представление’はここでは、再現前化 (representation) の意味で「表象」と訳したが、「表象」という訳語は注

意を要する。同じく「表象」と訳されるスピノザの‘*imaginatio*’という用語は、むしろ臆見に近い意味を有しており、再現前化という意味で用いられているのではないからである。しかし、スピノザは、再現前化の意味の表象を「画板の上の画」[E2P43Sch]もしくは「画板の上の無言の絵」[E2P49Sch]のごときのものであると批判している。したがって、「表象」という語は、本文にて明らかにされるように、スピノザの思想と隔たっているという意味合いも含んでいる。

- 8) ここで引用されているスピノザの情動のテーゼは、正確には『エチカ』の「情動はそれと反対のかつそれよりも強力な情動によってでなくては抑制されることも除去されることもできない」[E4P7]という記述だと思われる。
- 9) スピノザの引用は、畠中尚志訳の岩波文庫版による。ただし、訳文を変更した場合は、注にて断ることにする。畠中訳により「感情」と訳されている‘*affectio*’は、いわゆる人間の感情という意味よりも、身体の活動力という意味合いのもとにいわれているため、そうしたスピノザの思想を踏まえ、本論全体を通じて「情動」という訳に変更した。なお、スピノザの著作は略号で表す。Eは『エチカ』、TIEは『知性改善論』、CMは「形而上学的思想」(『デカルトの哲学原理』付録)を表す。また、略号は以下のとおりである。App=付録、D=定義、P=定理、Dem=証明、Sch=備考。
- 10) ‘*esse*’は、畠中訳では「有」と訳されているが、ここでは「存在」と訳した。
- 11) こうした情動とコナトゥスの力動的な関係は、ドゥルーズによっても「あれこれの情動 (*affection*) によって規定されるコナトゥスの変化は、われわれの活動力 (*puissance d’agir*) の力動的な変化 (*variations dynamiques*) である」といわれている。[Deleuze, 1968, p.211]。このように、スピノザにおいてコナトゥスは、自己維持の力もしくは自己保存の力といわれるにしても、それは静的なものではなく、力動的なものとして捉えられているのである。
- 12) cf. アリストテレス『形而上学』第9巻。
- 13) 括弧内：引用者
- 14) 守屋はZPDのアポリアを提起しつつも、ZPD理論に否定的なわけではなく、仮説実験授業にその解決の途を見出している [cf. 1994 (1986), p.168]。
- 15) ‘*causa efficiens*’は、畠中訳では「起成原因」と訳されているが、ここでは「作用因」と訳した。アリストテレスによれば原因は四種に区分されるが、スピノザは、そ

のうちこの作用因しか認めていない。

- 16) 『エチカ』では、同様のことが「偶然」と「可能」を同一視する視点から、以下のように語られる。「ある物が偶然と呼ばれるのは、我々の認識の欠陥に関連してのみであって、それ以外のいかなる理由によるものでもない。すなわち、その本質が矛盾を含むことを我々が知らないような物、あるいはその物が何の矛盾も含まないことを我々がよく知っていてもその原因の秩序が我々に分からないためにその物の本質について何ごとも確実に主張しえないような物、そうした物は我々に必然であるとも不可能であるとも思われないので、したがってそうした物を我々は偶然とか可能とか呼ぶのである」[E1P33Sch1]。
- 17) 上野修は、スピノザでは、可能も偶然もなく、すべては必然性のもとで考えられるという。上野は「神によって事物を考えると、事物はすべて必然になる。なぜならスピノザの神にはおよそ外というものが無い。在るのはすべて神のうちにあり、しかも神は偶然的にでなく必然的に存在する」と述べている [2005, p.8]。
- 18) スピノザは「同じ本性を持つ多数の個体が存在し得るようなものは何であれ、その存在のために、外部の原因を持たなければならない」[E1P8Sch2]と述べている。

文献

- アリストテレス『形而上学』(下) 出隆訳、岩波文庫、1961。
 ヴィゴツキーL.S. 『「発達の最近接領域」の理論—教授・学習過程における子どもの発達』土井捷三・神谷栄司訳、三学出版、2003。
 上野修「必然、永遠、そして現実性—スピノザの必然主義」、『スピノザーナ』6、2005。pp.5-21。
 江川隆男『存在と差異—ドゥルーズの超越論的経験論』知泉書館、2003。
 デカルトR. 『方法叙説/省察』所雄章他訳、白水社、1991。
 — 『哲学原理』三輪正・本多英太郎共訳、『デカルト著作集』3所収、白水社、1993。
 中村和夫『ヴィゴツキーの発達論—文化-歴史理論の形成と展開—』東京大学出版会、1998。
 — 『ヴィゴツキー心理学—「最近接発達領域」と「内言」の概念を読み解く』新読書社、2004。
 バークL. E. & ウィンスラーA. 『ヴィゴツキーの新・幼児教育法—幼児の足場づくり』田島信元・田島啓子・玉置哲淳編訳、北王路書房、2001。
 堀村志をり「ヴィゴツキーの遊び論における最近接発達領

- 域—スピノザ哲学からの一考察』、『ヴィゴツキー学』第9巻、2008.
- 「遊びのルールに見るヴィゴツキーの倫理—自由意志をめぐるデカルトとスピノザの議論を通じて」、『ヴィゴツキー学』別巻第1号、2010.
- 「ヴィゴツキーの心理学的システム論—自己展開的システムの意義」、『ヴィゴツキー学』別巻第2号、2012.
- 守屋慶子「ヴィゴツキー」、村井潤一編『別冊 発達4—発達の理論をきずく』ミネルヴァ書房、1994 (1986). pp. 165-175.
- Выготский, Л.С. Мышление и речь. *Собрание сочинений, Том второй*, Москва, Педагогика, 1982. (『思考と言語』柴田義松訳、新読書社、2001.)
- Проблема возраста. *Собрание сочинений, Том четвертый*, Москва, Педагогика, 1984a. (『年齢の問題』、『新児童心理学講義』柴田義松訳者代表、新読書社、2002. 所収)
- Учение об эмоциях. *Собрание сочинений Том шестой*, Москва, Педагогика, 1984b. (『情動の理論—心身をめぐるデカルト、スピノザとの対話』神谷栄司・土井捷三・伊藤美和子・竹内伸宜・西本有逸訳、三学出版、2006.)
- Игра и ее роль в психическом развитии ребенка, *Психология развития ребенка*. Москва Эксмо, 2005. с.200-223. (『子どもの心理発達における遊びとその役割』、『ごっこ遊びの世界』神谷栄司訳、法政出版、1989. 所収、pp.2-34.)
- Deleuze, G. *Spinoza et le problème de l'expression*, Paris, Minuit, 1968. (『スピノザと表現の問題』工藤喜作他訳、法政大学出版局、1991.)
- *Spinoza : Philosophie pratique*, Paris, Minuit, 1981. (『スピノザ—実践の哲学』鈴木雅大訳、平凡社ライブラリー、2002.)
- Engeström, Y. *Learning by expanding: an activity-theoretical approach to developmental research*. Helsinki: Orienta-Konsultit. 1987. (『拡張による学習—活動理論からのアプローチ』山住勝広他訳、新曜社、1999.)
- Spinoza, B. *Spinoza Opera*, im Auftrage der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, herausgegeben von Carl Gebhardt, Heidelberg: Carl Winter, 1925. (『エチカ』上下、畠中尚志訳、岩波文庫、1951./『デカルトの哲学原理』畠中尚志訳、岩波文庫、1959./『知性改善論』畠中尚志訳、岩波文庫、1931.)